

和 崎 春 日*
WAZAKI Haruka*



都市伝統中核地域とアーバン・フリンジの交渉による地域社会の形成

—京都市北区衣笠小学校学区をめぐって

Community genesis based on communication between historical urban centers and urban fringes

— Case study of Kinugasa Primary School area, Kita-ku ward in Kyoto

1 はじめに

1-1 目的と対象

都市近郊の空き地・農地が、旧都市の膨張によって宅地化され、人口拡大して市街地化が進展していく都市化過程や社会変動の過程は、日本の各地で今も起こっている社会動態である。農村やへき地を離れて都市への人口集中が進む実態があり、また、旧都市からの人口移動による都市拡大という現象もある。これらは、全国社会変動に共通した社会現象である。そこで、本稿は、農地・空き地であった地理空間が、どのような市街地となり、そこに住む住人が実際にどういう仕事に就いているのか、そして、都市勤め人（サラリーマン）と古い業態の伝統的職業人とがどのように新旧で混生されるのか、その変動実態を本稿で析出し都市化地域の社会動態を明らかにすることを、本稿の第1の目的とする。

宅地・市街地となった旧都市外周（アーバン・フリンジ）地域の社会特性を、その職業構成から考察するとき、旧都市と膨張し市街地化した旧アーバン・フリンジとはいかなる関係を持つのか持たないのか、は都市周辺生活がつくる地域社会の社会接触や地域交流の意味を考え

るうえでも、意味ある考察になる。これが、第2の探求テーマである。

そこで、このテーマを考えるうえで、1950（昭和25）年代以降に急激に都市化していった、現在の京都市北区衣笠地域を対象として考える。この衣笠・地域社会は、これまで私が長年、調査研究してきた宗教儀礼・伝統祭礼である、通称「大文字」と呼ばれている「京都五山送り火」の一つ「左大文字」祭礼の実施組織である左大文字保存会が所在する地域である。都市祭礼・左大文字という「祭り」の特徴の歴史的維持と変容を考える上からも、戦後の経済復興期と高度経済成長期の京都の都市外周地域アーバン・フリンジの地域社会形成の動態には、長く関心を抱いてきた。1960（昭和35）年前後、左大文字行事は、宗教儀礼性が大きく整備され祝祭・祭礼性に耐える都市大行事の特徴を一層強化していった⁽¹⁾。その文化変容を跡づけるこの地の社会変動がどのようなものであったか、を解いていく研究作業を本稿でおこなうとも、本稿を位置づけられる。それを、今回、宗教現象や祭礼ではなく、地域の社会変動に特に集中して考察を進めようとするものである。

*中部大学名誉教授

1-2 対象地：京都市北区衣笠の特徴と問題意識・分析方法

京都市北区衣笠の戦後の経済復興と社会変動にともなう地域社会の形成については、和崎洋一の論考がある⁽²⁾。

京都市の現在の区割りを見ると、京都の都市としての歴史的核と、そこから周辺部に、かつてのアーバン・フリンジに展開した都市発展・膨張の跡が良く理解できる（図1）。昭和20年（1945年）代はまだ、現在の北野白梅町より北側から立命館大学をとって金閣寺までの京都市北区の衣笠地区は、都市外周で市街地形成が

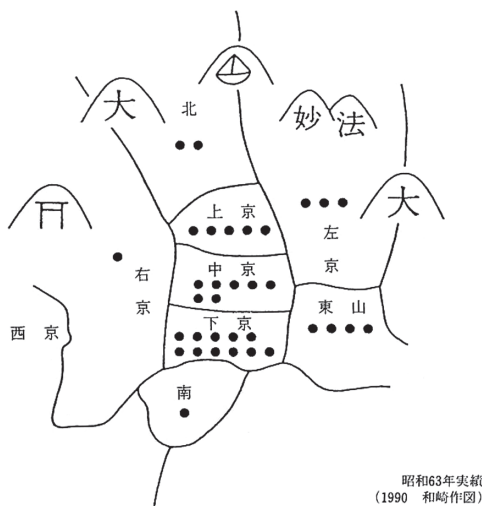


図1 京都市観光課が「大文字」の消火協力を依頼したホテルの網ノ目分布（34ホテル）上京区・中京区・下京区が小さい。



写真1 舗装された西大路通と衣笠小学校。真北に見える山が左大文字の大文字山。（1959年 和崎洋一撮影）

これから始まろうとしていた時代である。京都外周の大通りである西大路通は、京都の市街地を横の東西の大通りと縦の南北の大通りで囲むように整備していった、その一環の南北を走る大通りである。1939（昭和14）年東西の北大路通（北端）と南の九条通（南端）が整備されここに市電が開通したあと、市電の西大路線を貫通させるべく整備がすすめられた。市電西大路線は、1935（昭和20）年に千本北大路からわら天神前まで延伸し、1936年わら天神・白梅町も延伸開業した。白梅町から北へわら天神、金閣寺までの西大路通は、昭和28年頃、砂利道となって舗装化への整備拡充が急進展していたときであった（写真1）。都市勤務者になることが生活の利便性を享受できることと結びついた。

京都市の現在の区の区割りを見ても、上京区・中京区・下京区は、京都の真ん中を占め、小さく凝集している。いわゆる歴史的な町場である。他方、京都の西北では、北区と右京区があるが、北部・西部の京都北山や嵯峨野の山林地域を含む広大な土地域が、北区、右京区である。都市中心地から拡大発展して後から都市形成がなされたからである。この事情は、市街地としての後発展地域の左京区でも同じことである。後に金閣小学校として独立することになるが、京都市北区の衣笠学区は、今の金閣学区も含んでスタートした。昭和30年から昭和35年くらいまで、空き地・農地が売却され、衣笠小学校学区の宅地開発と人口膨張によって、衣笠小学校1校では生徒人口を収容できなくなり、金閣寺の南西角に、衣笠小学校分校を創った。たとえば、1949（昭和24）年生まれの小学校生徒を例にしていえば、1～2年生時に衣笠小学校と一緒に通学していた北区衣笠御所ノ内町、大祓町、鏡石町、氷室町などの生徒たちは、3～4年生時に衣笠小学校分校（後の金閣小学校・1965年設立）に通学し、5～6年生

時にまた衣笠小学校に戻って通っている。学区構成がくるくる変わるほど、人口増加と社会変動が大きかった。

和崎洋一は、「地域社会」が創り出されてくる創造動態を描き出そうとした。新興住宅地にも「乾かない」社会交流のある「地域社会」が生成されることを、描こうとした。京都大学人文科学研究所の論文集に載せた「地域社会の研究」に、そのテーマの発生と問題意識を書いている⁽³⁾。

「伝統的な地域社会の分解や再編成が進行しており、また一方では新しい地域集団—例えば団地が形成され、しかも、全体として近代化＝都市化・一様化の線にそって、現在および未来の人類社会の問題を投げかけている。筆者は、このような都市化・一様化の進行するなかにあつて、一中略—社会の近代化の産物である、いわゆる都市生活者がつくる居住地域の中にまとまった地域社会が形成されるか、という問題を提出するものである」。

本稿では、この問題意識を引き継ぎつつ、よ

り具体的には、前段で、先行研究によってこの地域の社会動態を跡づけ衣笠地域の社会特性を析出して、後段で、新興住宅地となった当時の衣笠の住人の職業構成を分析する。それによって、この地の急激な変動期にあった当時の都市的状况を明らかにしようとするものである。

2 先行研究から引き出す衣笠地域の社会特性

2-1 学区の歴史的外観を和崎洋一の衣笠地域社会研究から見る

和崎洋一の論考によれば、1889（明治22）年の市町村制発布の際、日本は、東京市、大阪市、京都市の3大都市でスタートした。このとき、京都市に隣接した近郊6部落（大北山・小北山・松原後に小松原・等持院・北野・大將軍）が、京都府葛野郡衣笠村になった。人口1199人、戸数225の衣笠村である（図2参照、和崎洋一「地域社会の研究」155頁）。「その後京都市の発展とともに、徐々に都市からの移住者がふえ、大正7年（1918年）には京都市上京区第

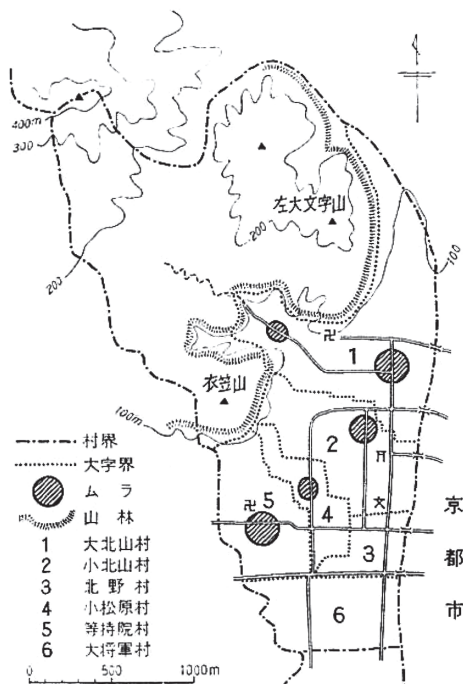


図2 京都府葛野郡衣笠村

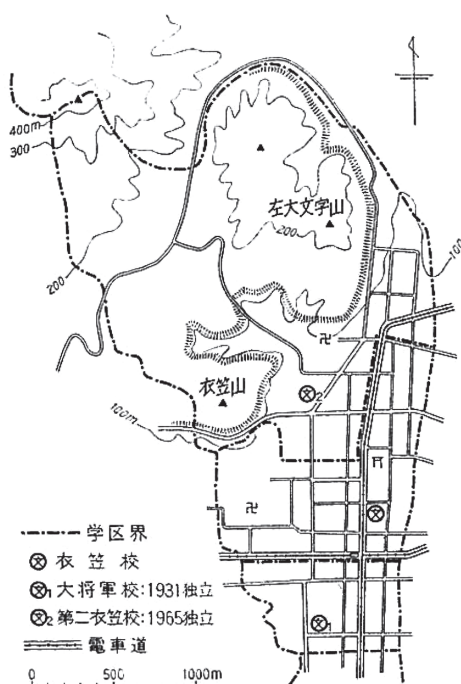


図3 衣笠学区の分校の独立

35区に編入された(人口2,968人)。以後、近郊住宅地として、しだいに田畑が宅地にかえられてゆき、昭和10年(1935年)には、大將軍区域が学区として独立した(人口12,800人、戸数2,696)(図3参照、和崎洋一「地域社会の形成」155頁)。その問題とテーマの設定は、上述のように、「土着(旧来居住者)と入組(移住居住者)が新興住宅地でいかに地域社会を形成させうるか、その様態は」というものである。以下に、その未整理の相互に照応し合うフィールドノートとアンケートを、今回は特にフィールドノートを、取り上げてまとめる分析作業を行う。

2-2 先祖儀礼、「あの世」と「この世」のコミュニケーションの地—和崎春日の研究

〈天皇陵墓・旧「京三大風葬の地」・大文字五山送り火との関係〉

京の北山地域の文化の起源だと地元社会が主張する集落が「大北山」集落である。足利義満が建てた禅宗の大寺院・北山鹿苑寺、通称「金閣寺」に最近接の集落である。金閣寺は、まさに京の北山にある鹿のいる山である。金閣寺を守り見下ろすようにある、京都五山送り火の一つ「左大文字」の点火が行われる「大文字山(大北山)」がある。そのふもとに展開するのが、この衣笠小学校学区、衣笠地域社会である。

左大文字の大文字山の左隣は、これも衣笠学区の地域社会を見下ろす「衣笠山」である。つまり、衣笠山や大文字山の西や北奥では、市街地化がすすむ長谷町や原谷乾町もあるが、山地が卓越し、山地と平野の境界部分には、龍安寺、仁和寺の有名寺院が連なっている。さらに禅宗の大本山である妙心寺もある。衣笠山と大文字山の東側と南側には平野がひらけ、この開けた空き地・農地が今の衣笠地域社会へと宅地化されていった⁽⁴⁾。

この地は、「御陵さん」と市民が散歩などに親しみ、住民や子供に憩いを提供する緑の地、

天皇陵墓も数多い。堀河天皇陵、一条天皇陵、二条天皇陵、後朱雀天皇陵、後冷泉天皇陵、後三条天皇陵がある。この山地を西に少し進むと、宇多天皇陵もある。花山院天皇陵は衣笠地域の大北山集落の中、今の町名では衣笠北高橋町にある(図4参照)。

これは、盆の大文字をはじめとする「京都五山送り火」儀礼に関係する。この五山で先祖送りの盆送り火儀礼が執行されるのだが、京都の東から西に向かって順に、東山・如意が嶽の「大文字」、松ヶ崎・西山東山の「妙法」、西加茂の「舟形」、大北山(大文字山)の「左大文字」、嵯峨鳥居元の「鳥居形」の五山で、盆の先祖供養の火が焚かれ、「あの世」の幽界へ祖先霊を送る。盆供養の送り火儀礼なのだが、都市的に規模拡大して儀礼から祭礼の特色をより増大させることになった。

この五山の精霊送りの地のなかで、3つは、旧「京」の三大風葬地の歴史をもつ。「大文字」はかつての旧「京」の都の歴史的葬送の地・「鳥辺野」にある。なので、あの世への「大文字」とその麓にある町内で、幽霊館など「あの世へ送る」民俗が今も多く残っている。「左大文字」の所在地も「蓮台野」という旧「京」の三大葬送地の一つである。そして、五山送り火の一つ、西の「鳥居形」も「化野」という歴史的葬送の地に立地している。蓮台野の東の部分にあたる紫野は、旧都人が野原で楽しんだ「散策地」でもある。京都を取り囲む歴史性ある山々の麓に、これらの旧集落が立地し、旧京都府葛野郡衣笠村も蓮台野—天皇陵墓—「左大文字」という宗教的結びつきを持っている。したがって、大文字山は正式には大北山と称し、その麓の集落「大北山」が長く、左大文字を歴史的に継続して点火してきた。戦前戦後の衣笠地域の大北山集落の地域指導者であった内田雄六(現在の左大文字保存会の前身で左大文字を担った祭祀組織・革青同志会の当時会長)の聞き取り(1971年当時)によると、この地は、「金閣寺の建立に伴って足利義満の時代



図4 天皇御陵が多数ある衣笠地区（河島一仁、2017、16頁より転載）

「じゅうにけ」と呼んで12軒の家が建っていた。その時以来、大北山集落はここに立地して左大文字を担ってきた」と、衣笠大北山地域の人たちが伝承としてもつ左大文字の起源を誇る。

大北山集落はそういう歴史的自負ももつ地である。

2-3 立命館の立地との関係―河島一人の衣笠研究

この衣笠地域や等持院の地域社会としての特色を、特に大学や学問世界との関連で研究した河島一仁は、この近辺の戦後の交通状況を記している（「京都・衣笠の地理的变化（1868～1960）―等持院村と立命館―」『立命館文学』649号、2017年）。

「現在、北野白梅町駅が始発終着駅となって、京都の西の幹線道路、西大路通と京都の北の幹線道路・今出川通の交わるところに北野白梅町駅が立地している」。だが、この変化を河島は、「京福電鉄北野線の開通当初における起終点は、北野天満宮の南に位置した北野線であった。そこから図の西端近くにある宇多野駅（旧称・高尾口）までは、大正14（1925）年に開通している」と述べている。そして、大学との関係に入り、自らの勤務大学（立命館大学）と衣笠地域社会との関係に入っていく「衣笠山の南麓には『立命館大』と書かれている。ここが立命館大学の衣笠キャンパスである。20年（2020年和崎記）現在では、法学部、文学部、産業社会学部、国際関係学部、そして映像学部、などがここに位置している」。そして地図上の地名記載を捉えて「『立命館大』の南には、縦書きで『等持院』という文字が2つ記載されている。西側のそれは寺院名としての「等持院」であり、東側が地名としての『等持院』である」⁶⁾。衣笠は、大学街なのである（写真2）。

私も、この衣笠地域に育ったインフォーマントとして記述すると、等持院と立命館は結びつ



写真2 1959年の衣笠地区。西大路に「立命館大学理工学部」の標識案内が建てられている（和崎洋一撮影）

いていることが、肌で理解できる。立命館大学の住所は、京都市北区等持院北町56-1である。私は、生まれて6歳になるまで、京都市北区等持院北町58に住んでいた。立命館の真隣りである。私がこの等持院北町に住んでいた時、当初は、立命館メイン・キャンパスは今出川の同志社大学の南側にあった。御所の真東で、立命館・広小路校舎と呼んでいた。私の等持院北町の家裏は、広大な空き地で、旧「馬場」だった。本論のテーマである衣笠地域社会の都市化に伴う社会変動と文化変容でいえば、今の立命館大学衣笠校舎が建っている場所は、私が従兄弟・本野陽に自転車の乗り方を初めて教わった旧馬場と、プロ野球・小西得郎が監督をしていた「松竹ロビンス」の旧球場があった。つまり、この辺りは空き地だった。松竹ロビンスは、太陽ロビンスを映画会社・松竹が購入した球団で、後に大洋ホエールズと対等合併して、洋松ロビンスとなり、1953～1954年に、この衣笠球場がプロ野球球場として使用された（大洋ホエールズは、今の横浜ベイスターズへと継承される）。この球場の正式名称は。その所有者から「立命館衣笠球場」である。ここに、立命館大学が建っていった。

等持院、衣笠の都市的な市街地化、宅地化整備は、まさにこれから始まろうとしていた時期で、水上勉が芥川賞を受賞した『雁の寺』は立

命館が所在する、または、接する等持院の寺のことで、水上勉が小僧をしていたその修業時代を舞台としている。こういう有名な等持院にも、金閣寺にも、衣笠の子供は、拝観料とは無縁で、裏庭や境界の不鮮明なところから勝手に子ども遊びで出入りしていた。寺領地を囲い込んで聖地とし、そこに宗教・観光に伴う経済価値をおくという観念、つまり拝観料も、この頃ようやく始まったばかりであった。観光開発の急激な進展は、全国総合開発計画が発表される1962（昭和37）年前後に起こってくる趨勢である。これが第1次の開発計画で、新しい開発計画以降へと発展していくことから、略して「全総（ぜんそう）」と呼ぶ。次が「新全総（しんぜんそう）」である。1964年10月10日には、第18回オリンピックである東京オリンピックが開催された。東海道新幹線開通はその直前の10月1日である。全総とあわせて、日本が発展途上国から高度経済成長を果たして、「先進国」への参入切符を取ろうと、池田隼人首相の「所得倍增」計画などとあいまって、全国挙げての経済成長に突き進んでいた潮流の時である。

3 和崎洋一による衣笠学区フィールドノート&アンケートの「まとめ未完」を活かす

3-1 論文で説かれていること

和崎洋一は、小学校を基礎とした学区が一つの有機的・包括的な「地域社会」となることを明らかにしようと、現在の京都市北区衣笠地域に焦点を当て、衣笠小学校学区を対象にフィールドワークを繰り返し、目的化しない散策のフィールドワークを一軒一軒訪ねるように聞き取り調査を長年かさね、アンケート調査も行った（主として昭和35年～37年調査）。その調査研究の成果は、当時、和崎洋一が研究員をしていた京都大学人文科学研究所の論集『人文科学報』第21号（1965年12月）掲載の和崎洋一「地

域社会の研究」（pp.153-174）や、同研究所から発行された『共同体の比較研究』第3輯（1965年10月）掲載の「住宅地の地域性と土着との関係」（pp.1-22）に発表された。また、東大のような人類学を学ぶ学部や講座・研究室がなかった京大では、人文科学研究所や理学部、そして今西錦司博士を中心に、京都大学人類学研究会が設立されていた（1964年）。そして近衛通りにある京都大学楽友会館で自主研究会を重ねたのだが、その研究会を「近衛ロンド」と呼んだ。

この研究会「ロンド」＝エスペラント語で集い、の命名も、エスペ란ティストの和崎洋一たちが案出した。和崎洋一は、エスペ란ティストの父・本野精吾の家族文化の中で自然にエスペラント語とその西洋流理想文化を身に着けていた。大正9年生れて旧制第三高等学校の理科（和崎洋一は乙類：当時の名前は旧名・本野洋一）に入学している。この時から普遍理想を求めてエスペラント語とローマ字運動に傾倒している。河島一仁との関連でいえば、和崎洋一は立命館大学で文化人類学を教えていた1977～1980年当時（非常勤）、学生と地域で学ぶ立命館ロンドを創りロンドで衣笠調査を行っている⁽⁶⁾。富山大学に赴任すると富山ロンドを創り、トランペット奏者渡辺貞夫（ナベサダ）とともに地域ロンド学びを進め一緒にタンザニアに赴いている。中部大学に赴任すると、歴史ある古書店・木村書店で学び集いを組織し、木村ロンドを開いている。このように、等持院や衣笠地域は、後章で検討する絵画・音楽・芸術のみならず、「モダン」を持ち込もうとした学者たちが集住した地域である⁽⁷⁾。立命館と相まって、芸術アカデミアの街になっていった。

1967年には、近衛ロンドの第4回となる会報『人類学研究 Konoe Rondo de Anthropologio』67-1 が発刊されているが（エスペラント語の副雑誌名）、ここに和崎洋一「都市住宅地における地域社会」（pp.3-5）を発表している。

この元となった近衛ロンドの講演の開演日は1965年10月13日である。この要旨が、和崎洋一の研究の地域社会研究の目的と意義をコンパクトに表示しているので、ここに記述する。

「構想は、地域社会の研究であります。地域は京都市上京区衣笠地域です。シェーマを大別しますと、①都市住宅地における地域社会の成立、②宅地化の過程における土着と入組、③地域社会における男と女、となります。(学会発表は、大体、今述べたような構想で展開する予定です。①に関しては先年に発表しました。)家を中心に考える時、女は家に残り、地域社会に介入する理由等を追求しました。覚えていらっしゃるでしょう。38度ライン仮設であります(参考図)。=図表—地域社会の単位として、私は学校をあげ、それで地域社会の把握につとめていたことも断っておきます。女性がその担い手であるということも発表しました。」(p.3)

さらに細かな分析に進む。

「心意的考証に関しては、募金による協力指数の算出につとめました。これもまた図を見てください。=図表=学区の地域性の外的なファクターに宅地化があることを、図の分析より指摘しておきたいと思います。衣笠学区の場合、学区がたまたま2つに分かれました。けれども図でござんになります、個人派とも言うべき地域が分校へ、属地的とも呼ばれる人々が本校に残りました。故なく、故ありに分れたのであると、私は考えます。団地などの位置づけについても考えてみたいと思うのですが、今後の分析にまちたいと考えます。伝統的な地域社会と、移住者中心の集団を、個別的な宅地化が進行した土地、集団的集中的宅地化の進行した土地、団地・近郊住宅地の位置づけをやるという、3つの視点から調べてみるならば、地象原理を、構造と機能を把握し得たうえで、究明することができるのではないか。私が、主に図で説明し

ましたようなことは、日本的な地域構造の特色ともかんがえられるのではないか。」(p.4)

後段の和崎洋一の構造抽出については、また稿を改めることとし、本稿ではアンケートと対応しているフィールドノートの記述からいえることを析出する。アンケート自体の集中的分析は、次稿で考察を深めたい。前段で指摘されている地域社会形成上の構造析出が意味あるものだと思う。

ここで成果だと私が考えるのは、学校地域社会を支えるPTAの幹となる諸活動を支え実施している婦人たちの活動、女性行動を実直にすくい上げ、地域社会の形成での女性活動の主体的で大きな意義を指摘していることが、意義をもつ。学会の論調や時代風潮よりもかなり先駆けて、家に女性が多時間居ることを、単に産業戦士の後ろ支えなどではなく、この時すでに女性活動の主体性と先進性を指摘していた意義は大きい。「日本のコミュニティ形成は、女性が成した」ことを端的に指摘している。それも学区を舞台に社会形成がなされると指摘している。高度経済成長に突っ走る時代、人口構造でこうなるのがザイン(マックス・ウェーバーの *Sein*)の実態分析として頷かされるのだが、それを社会的意義ゾルレン(マックス・ウェーバーの *Sollen*)に引き付け、女性の主体性発揮として描き出した点に価値がある。

さらに、「女38歳ライン」を理論標語として提示し、学区活動・地域活動への参加が急激に増加して、その行動の意味が変質する女性の年齢画期を析出した事も意義ある。日本のコミュニティ形成と「女性38歳にしてなる社会的自己覚醒」とがリンクして意味作用しあい、社会が生成された、ということが指摘、析出された。この時代、すでにこうした詳細なフェミニズム考察を和崎洋一は衣笠研究から行っている。徐々に改善に向かう方向はあるとはいえ、男性が地域社会に占める意義が希薄なことは、

現在でもなお大きな社会問題であるが、戦後の1965年当時の日本6大都市の近代化が進む都市の地域社会で、つまり、人口膨張が続く都市化地域で、「女性が38歳にして立つ」、つまり、女性が社会の意味を認識して自立する、社会人になる、地域社会人になる、と現代女性の自立市民像を描き出したのは、日本の地域社会研究で一つの発見、独自性の表出であった。女性が子育てに使う時間または子育てに要する全面的エネルギー集中から、子どもによる生活の自己運営を生物的・物理的に任せられる年齢帯は、今日でもさほど変わらないから、社会的支援の装置が発達してきているとはいえ、女性の社会参与の増大とその自己意識化による38歳自立ラインは、一定の有効性を今日でも持つだろう。

また、この研究は、その土地の土着、旧来からのいわば代々の居住者と、新参の移住者・入組とが、乾いた殺伐に情さず社会理想を追う近代共生の地域社会を形成しようということを計っていった混生の地域社会形成の可能性と意義を説く、重要な意味をもつ研究でもあった。異文化は通じ合えるのだと、論は主張している。これが、衣笠地域社会、衣笠小学校学区から引き出された社会形成論であることを、再認識し、この地域をもう一度、ここに考察する。

ここで、興味深いのは、土着といっても都市の近郊集落や都市外周、アーバン・フリンジの



写真3 金閣小学校近くの農家と建て売り住宅
(1959年 和崎洋一撮影)

集落においては、街人（まちびと）伝統を長く有する土着者はおらず、新参の入組とともに都市市街地と都市外周の都市化を共に創造していったという点である。この点は、客観的に見れば、共同作業性が強く、居住年の長短による社会的イニシャティブの一方的保有に大きくは帰しなかった、と言える。もちろん、土着者からの、土地を持っていたので、そこに移り住んだ人たちへの先住性と集落伝統への生活知識のいくらかの優位点の強調はあった。だが、その生活する土地の歴史的意味や地理的・社会的知識さえ、その土地が都市化によって変質・変容していくから、土着・入組どちらにとっても、都市化・近代化・市街地化による環境変化、職業変化、集落変化等々の新しい社会状況に対応していかなければならない、という両者新参性は、土着・移住者ともに共通してもっていた（写真3）。こうした社会変動期での、社会生成の原理の一つを和崎洋一研究が描いたことは、まちがいなく意味があった。これは別稿でより深い分析を進めたい。

3-2 フィールドノートから引き出される衣笠地域社会の職業像と都市像

この資料は十分に活用されていない部分を残したまま、長く眠っていた。和崎洋一は、衣笠地域のいわば軒一軒を長い年月をかけて歩いたと思われるフィールドノートと、それに相互に対応したアンケートを残している（昭和35年実施）。完全なアンケート集計へと進む前に、それに対応したフィールドノートから読み取れる社会変動のあり様をまずまとめてみる。その作業を本稿でおこなう。本論の地域社会分析の基となる資料収集の責は和崎洋一が、その一部をまとめ解釈する作業の責を和崎春日が負う、ということである。

和崎洋一の調べでフィールドノートに登場する、衣笠小学校学区を構成する町々は、一つず

つ拾うと、次の各町である。記されていた町名をそのまま列記する。

〈衣笠23町〉

衣笠高橋町

衣笠北高橋町

高橋東部町

衣笠街道町

衣笠北天神森町

天神森町

衣笠御所ノ内町

衣笠東御所ノ内町

衣笠西御所ノ内町

衣笠馬場町

西馬場町

衣笠大祓町

衣笠東尊上院町

衣笠西尊上院町

衣笠総門町

衣笠西開町

衣笠東開町

衣笠荒見町

衣笠鏡石町

衣笠氷室町

氷室町中町

大北山字赤阪町

大北山原谷町

〈平野7町〉

平野鳥居前町

平野宮本町

平野宮北町

平野桜木町

平野八丁柳町

平野上柳町

宮北町

〈小松原1町〉

小松原北町

〈等持院6町〉

等持院北町

等持院西町

等持院東町

等持院南町

等持院中町

上京区等持院中町

〈北野1町〉

北野紅梅町

こうした衣笠小学校学区を構成する町々の町名が記述されていた。

3-3 衣笠の地域を特色づける店舗、職業の分析—本稿の具体的分析項目とその手順

衣笠各町で、和崎洋一がスキップし聞き取れなかった、訪問できなかった家屋ももちろん多々あるわけだが、全体としての地域社会の動向・傾向が読み取れることは、疑いない。たとえば、職業などは、いくら抜け落ちた聞き取れていない居宅があったとしても（アンケートであれ、個別聞き取りであれ）、全体としての生業構造を読み取ることはできる。簡単に言えば、都市近郊農地であったところで、農業経営を続ける農家か、違う職業を有する者かは、その職業列挙のなかから農業地域特性を有するかな否かが、見えてくる。そのほかにも、和崎洋一ノート（アンケートでも）には、その家の宗教状況や先住地、菩提寺などが聞き取られている。これによって、移り住んだ人の代かその先代か先々代か、菩提寺とする起源地からの移住の歴史、つまり、どこから京都・衣笠地域へ移住したか、が読み取れる。

だが、今、本稿では、具体的に、フィールドノートにある衣笠学区各町内の家々の仕事の内容を

集積し、そこから見いだされる衣笠地域全体としての職業の全体像を導き出す。まず、本論では。この都市的特色を有するであろう職業構成を示す衣笠地域社会の特色づけを抽出する。

具体的作業としては、一つ一つの職業を列挙してみる。同一職業と思われるものでも、土地の人が、住人自身が「この職業」と呼称した職業名を尊重して、それがノートに記されているわけであり、それを列挙していく。そうすると、全体で都市の地理学・社会学・人類学というアーバン・フリンジがどのような社会的特性を備えていたか、どういう方向に変容する社会変動だったか、が見えてくるはずだ。旧京都市の市街地を形成していた上京区・中京区・下京区から都市外周に経済発展して、衣笠を含む都市周辺部がどのように「都市化」されるか、が抽出できる。京都の近代史として言えば、旧・京都府葛野郡衣笠村が京都市上京区への編入を経て京都市北区衣笠にどのように変容したか、が析出される。

手順としてはこうである。記された職業・仕事を、和崎洋一フィールドワーク（1957年）手帳に現れる順番のままにアットランダムに列挙する。織物業と書き取った者もいれば、織物職、織布工と書いた者もいる。個人経営で自らの姓を冠して「～～歯科」と書いた歯医者さんもあった。これら個々の認識、表現を尊重して、そのまま列挙することに意義がある。地元民がもっている職業観や自己認識が見えてくるからである。まずカテゴライズせず、資料の整理順の若いほうから順に、100種まで追いかけた。そのまま列記する。

植木職、浴場業、薬剤師、製造業、造園業、建設業、銀行員、会社員、農業、織物業、食料品、印刷業、国鉄職員、～～歯科、染色業、帯地、医師、美術道具販売、食品販売業、織物職、織物従業員、官吏、画家、教育、工具、

寺院住職、呉服卸商、特別警察隊、餅菓子製造卸、木材業、織布工、染色画高工、木工、ホテル経営、美大教授、地方公務員、会社役員、図案業、糸くり、左官、会社社員、染色画工、會社員、木工、質屋、法衣商、木材商、第一生命、税務署、八百屋、図案、織物整理、料理仕出し、教官、帯地、料理職人、木工、織物紋工業、料理業、帯地製造業、商業、編物学院、京都市水道局員、菓子煙草店、京阪電鉄、洋服業、食物業、電電公社社員、青果卸、事務職員、糸繰、建築請負業、日本画家、鮮魚業、メリヤス編立職、洋傘肩掛商、学校教師、灸師、駐車場、糸組紐業、呉服悉皆業、呉服卸、弁護士、鹿島建設、公吏、一般食堂、鉄工業、雑穀商、製菓会社社員、茶・華道教授、無線通信士、貿易業、国鉄職員、彩色業、運転手、建材取引業、幼稚園職員、中央市場魚仲売、自由業

混然とした多彩な職業が衣笠学区を覆っていたかが判明する。農ではなく都市的職業に変容してきていることが、一目で判別される。これを、職業カテゴリーでまとめてみる。1957年当時、空き地・農地が次々に宅地化され、農地が減り、農業を職業とするものがほとんど見られず、多種多様な職業が衣笠地域の家々に出現していることがわかる。都市化をまずこの職業の多様性そのものから指摘できる。

さらに町場形成されていく都市的生活様式の商業店舗が実際にどのように構成されるか詳細に見てみよう。

〈職業カテゴリーによるまとめ〉

＊「町」商店街の職業（当時の都市化の表象）

浴場業

八百屋

雑穀商

植木職

造園業

木材商

左官

大工

木工

工具

板金工

質屋

美容業

運転手

警備員

電話売買業

*食料品関係

菓子問屋

料理仕出し

料理業

料理職人

一般食堂

食料品

食料品店

食料

食品販売業

食物業

餅菓子製造業

菓子煙草店

菓子卸業

清涼飲料水仲卸

*都市勤労者

会社員

会社社員

会社役員

会社重役

會社員

會社社員

団体職員

製薬会社社員

貿易業

建設業

銀行員

無線通信士（要資格）

第一生命

鹿島建設

東映社員

京阪電鉄

中央市場魚仲売

幼稚園職員

*公務員

税務署

公務員

地方公務員

国家公務員

国鉄職員

官吏

公吏

電電公社社員

公社員

鉄道員

京都市水道局員

特別警察隊

*新時代職業

ホテル経営

印刷業

鉄工業

商業

製造業

薬剤師（現代資格）

建材取引業（現代資格）

自由業

巻線加工業

*糸偏・京経済（西陣）

糸くり

織物業
 帯地
 織物整理
 織物調整工
 織物職
 織物従業員
 織物
 帯地屋
 織布工
 織物紋工業
 染色業
 糸組紐業
 呉服悉皆業
 呉服卸
 呉服卸商
 帯地製造業

*医療

～～（個人名） 歯科
 医師

*美術・工芸・芸術・学術・教育

図案業
 美術道具販売
 染色画工（衣笠の美術家集中の礎）
 染色業
 染色画高工
 染色工
 図案
 画家
 教育
 教員
 教諭
 教職
 弁護士
 教官
 文部教官
 美大教授

茶 - 華道教授
 華道師範
 織物学院

*農業

農
 農業（原谷）

*宗教

寺院住職

3-4 都市地域としての衣笠へー農を脱した 都市的職業の横溢

この職種まとめから、旧「京」の外周を示す地名、つまり、京の西北部でいえば、葛野郡、平野、紫野、蓮台野、北野、柏野などの地名に表象されるように、かつて「京」人たちや戦前の京都居住者たちが都市市街地からちょっと足を延ばして、当時の寺院巡りやリクレーションや野遊びを楽しんでいたところの、今の宅地や商業地の広がり把握できる。そうした野原としてのアーバン・フリンジが都市化されてきている動態や変容を読み取れる。

まず、新しい町場形成が成されていることを指摘できる。

浴場業（銭湯）、八百屋、料理仕出し、一般食堂、食料品店、菓子煙草店、など農から都市化が進んでいることがわかる商業的な街風情・商店街（町場）風景を示す職業群がある。菓子煙草店などは、都市的な下町都市の普通の光景であった。町、街、都市共同体の結節点を示す店舗である。自らは「鮮魚業」と表現する魚屋もある。一般食堂と表現して、「一般」の中に何でも扱う、という、丼もカレーライスもうどんも定食もとその多様性がイメージされる。宅地化が行っているから、駐車場のように、農地や空き地から転じたアーバン・フリンジの特色を示す仕事名もある。洋傘肩掛商のように、洋傘を販売しているが、それが街の家々を回って売って

いることがわかる説明である。この時代は、魚も自転車の荷台に数匹入れた出前箱で売り歩く魚屋というプチ・メティエの移動販売も多くあった。ランプ・電化製品や宝石なども、自転車で一品商売として売り歩く姿もよく観察された。伝統産業の職種では、日本の仏教各宗派の大本山や神道の大神宮が集中する宗教都市としての特色と、繊維産業とが複合して、繊維業でも法衣業という職業を挙げている人もいる。呉服悉皆業のように、呉服のことならなんでも伺います、という呉服への専門性を主張する職業名もある。数多い繊維業については、後述する。

伝統産業の職種と現代職種が混在している。どちらにしても、農業からの転換がほぼ完了し宅地化、商業市街地化が進展していることがわかる。会社勤めが多数、登場している。

京阪電鉄、鹿島建設など、勤める会社名そのものを挙げる人もいる。製菓会社社員のように、会社の分野を書き込む人もいる。事務職員など、現代の組織の職種で答える人いる。

京都中心地の都市的施設に勤務するものとして、中央市場魚仲売、青果卸があがる。カルピスからコーラへの変換期あるいは追加期で、清涼飲料水仲卸という近代への時代変換を表現する職業名もでてくる。今は消えている職業だが、株式や目に見えないもの売買で、最も都市的ともいえた、電話売買業という職もあがっている。無線通信士のように、現代が求める資格で職業を挙げたひともある。このように使用する技術で職業を表わす人もいる。近代技術が多い。運転手もある。都市近代を表わす資格である。薬剤師、医師、弁護士があがる。

公務員が登場する。官吏、公吏のように、公務員であることを当時の「普通の」表現で表すものもある。国家公務員、地方公務員という言い方もあらわれ、現代的な言い方である。国鉄職員もそうである。公務員は「偉い」という風情をこの頃は表出していた。実際、国鉄職員に

は、国家公務員だぞ、という自我意識があった。国鉄駅トイレは当時うじ虫の集住地なのに、その権威の自己主張は大きかった。サービス業という意識はなかった。電電公社社員もこれに準じる。「確かな」仕事、「偉い」仕事、壊れない信頼に足る仕事、というイメージが強かった。このイメージは今でもあり、村落や小都市では、公務員は今でも権威さえある確かな仕事という隠喩をもつ。国家の整備、そこからの保証という都市近代に繋がった「確かさ」を管理する仕事である、という点は今昔かわらない。衣笠が都市近代に浸って行っている、ということである。

農、農業と自己職業を規定しているものは、数少ない。

3-5 都市自由の極致—自由業と芸術の地域社会

自由業などという都市近代が生み出した生活様式の極致の表現が社会的に伝わる職業名として、この当時すでにあり、衣笠に登場した。

上の職業の中では、画家、図案、美大教授といった職業名が並ぶ、一群の現代の芸術性を表象する職業群が抽出できる。「衣笠芸術村」という視点で衣笠地域を見る分析もある（後述）。新しい美術・芸術にともなった職業や技術、その技術を持った工芸人などが、ここに移り住んできて、その流れが凝縮的に大量集中したからである。あの人も、この人も、という形で衣笠学区には、日本画壇を代表・構成する洋画家、日本画家、建築家、デザイナーなどが住んだ。何人も、文化功労者や文化勲章者が出ている。学術の街であることも、それに拍車をかけて、増幅作用を起こす。現在、立命館大学や仏教大学が位置し、学者、文人、芸術家が多く住む。花園大学も近い。京都工芸繊維大学の繊維学部も大將軍、等持院南町に接して、つまりかつての衣笠学区に隣接してあった。芸術、美術と結びついた有名な古里、寺院・塔頭、神社が多い。

足利義満の金閣寺（鹿苑寺）、足利尊氏の菩提寺・等持院、日本古代神社建築で有名な平野神社、菅原道真を祭る北野天満宮、きぬかけの道に沿えばすぐ隣の小学校学区だが竜安寺、御室・仁和寺がすぐそばにある。天皇陵墓も一条天皇陵、二条天皇陵、花山院天皇陵など数多い。

〈衣笠絵描き村の成立〉—河島一仁の歴史地理学的研究

地理学者・河島一仁は、丹念に衣笠地域の地図分析を行っている⁽⁸⁾。

明治22年の町村制施行によって、大北山・小北山・松原・等持院・北野・大將軍は、一つに統合されて「衣笠村」になった。明治行政村である。その結果、それまでの公式発布の地図では、例えば、等持院村と記載されていたものが、村が抜け単なる等持院と字表記で記載されることになった。つまり、藩政村の境界は前面化されず、歴史のなかに潜在化することになった。

河島一仁は、衣笠山麓の等持院に立命館日満高等工科学校が設立され、等持院とその周辺地に校舎を新しく建立していった立命館大学との関係を考察するために、この明治以前の藩時代の境域に中の考察を行っている。河島の地図分析による指摘では、衣笠村の行政中心・村役場は、平野に開設された。これが、後の左大文字の大儀礼を歴史的に遂行してきた大北山と、一つの行政中心性を自負する小北山との、旧集落間の心理的な競争関係を表現することになる。平野の住人インフォーマント＝山口昌哉（京都大学理学部長・当時）によると、平野を構成する小北山は、行政中心性を有し、また歴史伝承的にも「自分たちは御所や尊さを宿した宮人との関連を持つもので、大北山とは違う」という自己認識を持っている、という。1909（明治

42）年の地図では、本論でテーマとしている衣笠小学校が、この役場の南に位置している⁽⁹⁾。

河島は、次のように、歴史地理学の詳細な地図分析の読み取りと考察を示す⁽¹⁰⁾。

明治42年当時、この地域の主要道路は、今小路と一条通で、一条通は、妙心寺を山門前を通り、仁和寺の山門前を通過して、福王子まで、西に続いている。通称では、「周山街道」と呼ばれ、（この当時から今でも、周山行きの京都市営バスやJRバス（旧国鉄バス）が運航されている：和崎・説明挿入）、等持院の現在の町名でいえば、等持院南町に一条通では、南側に蚕業講習所が、さらにその南には第五中学校あり、前者の蚕業講習所が後の国立・京都工芸繊維大学に発展している。（工芸学部が松ヶ崎・「妙法」にあり、繊維学部がこの一条通に面してあった：和崎・説明挿入）第五中学校は、後の京都府立山城高等学校になっている。衣笠小学校から衣笠中学校に進み、この学区の生徒が通う高等高等学校は、この山城高校だった。（昭和21（1946）年生れは衣笠中学から山城高校に入学して通い、昭和22（1947）年生れからは、衣笠中学から嵯峨野高校へと入学している。やはり、同じく、衣笠を含む京都西部の人口膨張が続いていたからこそこの学区再編である：和崎・説明挿入）（写真4）



写真4 （1959年 和崎洋一撮影）等持院中町(右)と木島櫻谷敷地(左)の間を通る今小路。突きあたりが洛星中・高等学校。旧・主街道とあって家々が並ぶ集落形成がある。

衣笠地域社会の芸術性—芸術・映画・学問

この河島一仁の考察によりながら、衣笠地域の芸術性の特徴を確認して把握する。

芸術家との関係を考える⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

20世紀の前半期では、まず、島田康寛によると、衣笠村に最初に移住した画家は、吹田草牧である。草牧は、1912（明治45）年に下立売御前西入から一条通に北接する衣笠園に転居した。かつての等持院村の藩政の境域に最初に移住したのは、木島櫻谷だと言われている。御池両笹町角から等持院東町に転居した年は、島田康寛は明治45年としているが、実方葉子は翌年の1913（大正元）年としていて、違いがある。今小路通に面して、櫻谷の居宅があったのだが、この敷地はかなり広く、現在西隣に隣接してある公園も櫻谷の邸宅の敷地だった。公園になる前は、衣笠幼稚園がここに開校されていた。

木島櫻谷に続いて、土田麦僊も、村上華岳も衣笠村に移住してくる。文化功労者、文化勲章受章者の小野竹喬は、1922（大正11）年等持院南町に移住してきた。そして、アトリエを等持院北町に構えた（写真5 金台寺・念仏寺）。

小野竹喬の息子、小野常正は、「竹喬と衣笠の思い出」と題する文を書いている。

「1922（大正11）年9月、欧州から帰国して最初に聞かされたのが、烏丸通り拡張のため、鞍馬口にあった自宅が接収されるということでした。困り果てた父に、当時の等持院の住職様から境内で使っても良いという大変なご厚意を戴いて、ともかく画室だけを移築することが出来、等持院南町に住居を得て毎日画室に通う日々が続きました。その頃、画室の近くに松竹撮影所があり、丁髷姿の俳優たちが歩いているのをよく見かけたという話も聞きました。勿論、観光道路も立命館大学も無く、衣笠山から等持院まで全くの自然の野原でした。」

小野竹喬は、1931（昭和6）年、等持院南町から等持院北町に転居した。「衣笠山から等持院まで全くの自然の野原」という環境が芸術に良いと、等持院住職は考えたようだ。和崎洋一は昭和37年前後の衣笠の写真を資料として多数撮影している（写真5）。（確かに上述で語られている「松竹撮影所内」とは、マキノ省三が設立した撮影所のことである。今でも等持院境内に、マキノ映画の記念碑が建っている。等持院は、日本映画発祥の地でもある。）

河島は次に日本画家で文化勲章受章者の山口華陽の衣笠移住を説明する⁽¹²⁾。

山口華陽も衣笠に移り住んだ有名な画家のひとりである。衣笠の自然に満ちた自然環境と、芸術家が多く住むという社会環境が、画家の居住に適していた。この地の画家にとっての適地性を、山口華陽の長男の妻が述べている、と論じている。山口華陽は、西村五雲画塾「晨鳥社」を引き継いだ。その油小路三条上がるから北野紅梅町に移住している（京都新聞1992年11月21日朝刊）。

山口華陽の長男・妻は、次のように衣笠の地を描いている。



写真5 小野竹喬が通った金台寺（左・北）と念仏寺（右・南）の間の等持院の道（1959年 和崎洋一撮影）

「山口華陽は、1928（昭和3）年9月に衣笠に移り住みました。その頃の衣笠は、西大路通りまだなく、今出川通は千本今出川まで、嵐電（京福電鉄嵐山線）の終点は白梅町ではなく北野天満宮下る所にあり、天満宮からはチンチン電車が走っていました。勿論きぬかけの道や観光道路などはありません。1935（昭和10）年頃の衣笠は平野神社の西は小松原あたりまでは田圃と畠。わら天神近くの金（攪）八幡宮のあたりは藁葺屋根の農家の集落があり、のどかな田園風景でした。平野神社の境内の西側は深い竹藪で、夜には狐が鳴き狸も住んでいました。衣笠山は松茸の撮れる赤松の山で、今立命館大学のある裾野は一面の薄の原っぱであっちこちに小さな池があり、子供たちの魚釣りの遊び場でした。

上で指摘された、文化勲章受章者・山口華陽の長男と婦人は、和崎洋一の知人であり洋一が開く等持院ロンドに夫婦そろって頻繁に参加し、フラクタル数学などをよく議論していた。山口昌哉（華陽長男、上述の京大理学部長）の妻・山口和子という。華陽の長男・山口昌哉は、数学者で京都大学理学部長を勤めた教授である。次男は、経済学者で甲南大学教授を務めた。長男妻・和子は、北野天満宮前の衣笠・西陣地域で名医の家系の出身で、今も開業している正木医院の長女である。

こうした自然を描くのに最適な好条件が衣笠に備わっていた（写真4）。同じように、当時の衣笠の自然環境を、水彩画家の柴田敦子（雅号、エッセイスト・著者；柴田敦姫）は、次のように書き記している⁽¹³⁾。

堂本印象も、今の立命館大学の衣笠校舎の北側に居住していた。堂本印象は、京都市立美術工芸学校を卒業後、西陣織の図案描きの仕事をしていた。京都市立絵画専門学校で

学びなおし日本画家を目指した。帝展第6回出展の「華嚴」で帝国美術院賞を受賞後、1936年京都市立絵画専門学校教授に就任。日本画壇に多くの弟子を輩出した。

衣笠小学校の卒業生としては、西山英雄の高弟であり湖山の描出で知られる宝塚造形芸術大学の教授だった曲子明良も、立命館に接する等持院北町在住で、かつて美術史家の佐々木剛三・早稲田大学教授居住地の隣の地に住む衣笠在住者である。福山の旧湯田村出身の金島桂華も日本芸術院会員で、この地に住み「衣笠会」を主宰している。美術性が美術性を呼び合うような発信、統合力を衣笠は地域力として醸成していった。

笠原一人の「衣笠芸術街」分析

笠原一人も、この画家・工芸家・建築家などの衣笠集中を論じている。笠原一人「衣笠・等持院界限における本野精吾を中心とした建築家の活動について」である⁽¹⁴⁾。河島一仁の分析と重なるところもあるが、違う視点も含まれるので、その部分を引用する。

「衣笠・等持院周辺の「芸術家街」の中に1920年代30年代を通じて、建築家が斬新な建築による拠点を創った例がみられる」。(笠原は、先述の河島一仁の衣笠への芸術家移住の列挙をまとめるように書いている。)
「京都市北西部、衣笠山麓一体には、現在も多くの画家や工芸家など芸術家が居住している。とりわけ日本画家が多いのが特徴だが、彼らがこの周辺に居住するようになったのは、明治末期から大正初期にかけてのことのようである。

まず、当時、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）の教授を務めていた日本画家、木島櫻谷が1912年に御池両替町の借家

から、衣笠山麓に移住する。おそらく木島の居住をきっかけとして、画家たちが衣笠山麓に住むようになる。村上華岳が1917年、土田麦僊も1917年、小野竹喬が1922年衣笠山麓に移住している。このうち、土田と小野は、京都市立絵画専門学校の同期生であり、またいずれも竹内栖鳳家に寄宿したりした仲間であった。画家たちの交流が衣笠山麓一帯に、芸術家街を築くことになったと言える。その後、村上が1923年に京都を離れると、画塾「衣笠会」を主宰した金島桂華が旧村上邸に住み、土田の転居後には、新大和絵を目指した宇田萩屯が旧土田邸に住むようになるなど、芸術家街は継続されていった。

他にも、徳岡神泉（等持院西町）、山口華陽（北野白梅町）、堂本印象（平野上柳町）、福田平八郎（竜安寺衣笠下町）、浜田観（小松原北町）、猪原大華（小松原北町）、麻田辨自（小松原北町）、伊藤柏台（小松原北町）、らの著名日本画家が居住した。さらに、土田や小野と交流のあった洋画家たちが移住した。黒田重太郎（北野紅梅町）、伊藤久三郎（等持院東町）らがいた。また、染色作家の楠田撫泉も（小松原北町）もいた⁽¹⁵⁾。「近代琳派」と謳われた福田平八郎も、竜安寺脇の衣笠下町に移住している。恩師・金島桂華宅に10年書生生活を送った黒光茂樹も等持院西町の住人である（京都新聞1992年11月21日朝刊）。黒田重太郎は、50～60軒くらいの北野紅梅町住宅地に、絵描きが比較的多く8人もいる、という陳述を語っている（昭和5年『京都新百景』）。

また、別稿でも、笠原一男はデザイナーでもあった建築家・本野精吾の衣笠地域へのモダン持ち込みの動態を、『『日本インターナショナル建築会』における本野精吾の活動と建築理念について』『日本建築学会計画系論文集』第583

号、157－163頁、2004年9月、で論じている。論題からも明らかなように、「インターナショナル建築会」というアヴァンギャルド前衛性に行く先進・近代を表象する建築グループを本野精吾は組織し、その活動をおこなっていた。その拠点が等持院北町にあった。

中川理は、画家が創りあげたであろう「空間の趣味性」というキーワードを提起している。つまり、画家、建築家、デザインに携わる者たちが、学術も含めて、パラ趣味ゆとり空間を「雰囲気」として創り出し、それが誘因力となって、芸術地の芸術性が一層増幅されていく、という動態を指摘している、と私は捉えている⁽¹⁶⁾。

当時、衣笠界限は自然があふれる地であり、それがとりわけ自然の産物のモチーフを必要とする日本画家たちに好まれ、そのことが「芸術家街」の形成につながったのではないかとかんがえられる⁽¹⁷⁾。笠原は、T.S. エリオットを翻訳し三高講師、京都帝大教授を務めた深瀬基寛も衣笠居住であったことを示している。衣笠に学術の街、多くの学者の居住地という冠はつけうる。

笠原一人は、デザインとも結びつく建築家の衣笠移住による「建築家の街」＝衣笠も捉えている。日本の気候風土を勘案した環境工学的な住宅を目指していた藤井厚二の衣笠在住を捉える。また「1924年、建築家の本野精吾が衣笠界限に位置する「等持院北町58番地」に自邸を建築したことで、衣笠界限には建築家による住宅がいくつか建てられ始め、建築家や研究者、画家が新たに居住し始めることになった」と1908年から京都高等工芸学校教授（現・京都工芸繊維大学）を務めた本野精吾の等持院移住が、他の建築家やデザイン関係者の衣笠流入の誘因エネルギーになったことを論じている⁽¹⁸⁾。

本野精吾は、コンクリートブロック素のまま使用していく建築様式で、中村鎮式コンクリートブロック工法を採用している。これは独自性

強い建築方法で、ドイツ留学から建築方法を得ており、日本モダンアートの一つの流れを創り出し付随するデザインも含めて牽引することになった（写真・本野邸）。そして、笠原は、中村建築研究所京都支所も引き込まれ隣に居を構えた、と捉える。ホフマンの「ウィーン工房」で働いていた建築家、上野伊三郎も本野に呼び込まれるように等持院移住を果たしている。こうして、あぎなえる縄のごとく多様な芸術性・学術性・文化性が衣笠地域に集中し、衣笠芸術街が成立していった、と捉えるのである。

映画撮影所の設立—マキノ映画の地、映画文化も衣笠に花開く

河島一仁の考察記述に沿いながら、衣笠地域が映画文化で満ちていく動態を跡づける（以下、前掲論文（4）28～31頁）。

「画家の転住の後に、衣笠に加わったのは、映画撮影所の設立である。一条通と馬代通りの交差点の南東部に、1918（大正7）年にできた大將軍撮影所がその最初の例である。1921（大正10）年には、マキノ省三が等持院の境内に撮影所を建て、同年の9月に竣工した。映画の初期隆盛期へ向かう新たな演芸文化の時代潮流のなかで、1924（大正13）年には、東亜キネマとマキノ省三のマキノキネマは合併する。翌年には分裂して。1925（大正14）年に、マキノ省三は御室撮影所を建立している。」

こうした映画撮影所の立地が続くから、これに付随した映画のセットや道具貸し出しなどを扱う「高津商会」も現在の京福電鉄の北野白梅町駅南側、今のスーパー・イズミ屋のところに長く立地していた。

昭和6年当時の映画施設は、かなり充実した映画撮影所であったことが、河島一仁の分析で

伺える。河島は、昭和6年当時の東亜京都撮影所の立地図を『キネマ旬報』第396号（1931）から引いてきている。これによると

「撮影所の中は、時代劇用と想定される「時代」と書かれた大ステージが3つもある。まだ茶畑と竹林があったことも記されている。この東亜キネマの製作本数も旺盛なもので、日活太秦、帝国キネマ長瀬・太秦に次いで3位を誇るものであった。これを示した昭和5年度・日本各撮影所・主要映画製作統計集によれば、続いて4位河合巢鴨、5位松竹蒲田、6位マキノ御室と続いており、京都、東京の映画製作所が名を連ねる」（『キネマ旬報』第396号、1931、複製年不詳、文生書院）。

1位、2位が太秦で、3位にこの衣笠の東亜キネマ、そして等持院の寺の中、衣笠にあった6位マキノ御室と7位松竹京都などを含めると、昭和5年当時、京都が映画製作の日本の中心であったことは間違いない。その胚胎の映画文化を等持院や衣笠が担ったのである。

河島一仁は、この『キネマ旬報』から、映画関係者の生活地、居住地を探し出している。この号の記事分析から、次のような居所確定を行っている。

「日本における10か所の撮影所に関して、詳細な情報が記載されている。東亜京都撮影所は、監督・撮影技師・装置・衣装・男優・女優・事務などの部門からなり、総計441名を擁していた。そのうちの126名に関して、氏名と住所が列記されている。126名中の34名、すなわち27パーセントが、等持院村の境域に居住していた。

その内訳をみると、等持院北町に12名、等持院西町に9名、等持院中町に6名、等持院南町に7名がいた。なを、等持院南町の7名のうち2名は、監督である」（前掲論文（4）30頁）

さらに、この『キネマ旬報』記事分析から、河島は、等持院の映画文化との結びつきを指摘する。

「京都における他の撮影所の従業員でも、等持院村の境域に居住する例が散見される。日活太秦の従業員のなかで9名が等持院南町に居住し、そのうちの3名は監督である。そのほかに等持院東町に1名、等持院西町に2名が住んでいる。マキノ御室の場合、12名の監督のうち3名が等持院南町に、男優1名が等持院中町にそれぞれ居住している。帝国キネマ太秦撮影所の場合、舞台課主任と男優1名が等持院中町に、宣伝部主任と監督3名および男優1名が等持院南町に住んでいた。(中略) 等持院南町には、複数の撮影所に所属する監督11名が居住していたことが明らかである。」ここから河島は「等持院村の境域内における住宅の増加、言い換えると集落の外延的拡大は、映画製作業との関わりで説明できるように思われる」と分析している(前掲論文(4) 30～31頁)。

等持院居住者であった私の少青年時代を思い起こしても、京福電鉄・等持院駅前のあった風呂屋(銭湯)「花の湯」に、喜劇漫談俳優チャンバラトリオや名前は知らないが映画の話をする俳優たちが来て出会っていた。また、衣笠小学校の正門前は、時代劇で日本一殺陣のうまい剣劇俳優といわれた、『素浪人月影兵庫』で有名な大俳優、近衛十四郎(1914～1977)の居宅があった。その息子たち、俳優・松方弘樹(1942年生)や目黒祐樹(1947年生)のなかで、目黒祐樹も衣笠小学校区在住者で卒業生である。今、シンガーソングライター・音楽プロデューサーとして知られる美樹克彦も、衣笠小学校の卒業生である(1948年生)。衣笠在住時には、目方誠という歌手名で音楽・映画界で活躍していた。

寺院・神社が集中する衣笠—縁日、祭礼による結節

京都には、仏教寺院、神道神社が、しかもその大本山や全国に展開する元となる始原の神社が多数立地している。衣笠地域も、その例外ではなく、寺社が多い。立命館が隣接する等持院について、芥川賞作家の水上勉は、当人の修行僧時代を記述した受賞作の舞台となった「雁の寺」、等持院について、次のように語っている。以下、河島一仁の論から引く⁽¹⁹⁾。

水上勉・供述「私は、十三才から十九才まで、衣笠山麓の」等持院で暮らした。それまで烏丸今出川の相国寺の塔頭の小僧だったが、相国寺での生活がイヤになったので飛び出し、放浪していたところを、郷里の海泉寺というお寺の和尚さんに拾われて、等持院に預けられることになった。昭和6年頃だったと思う」

河島一仁の『水上勉の京都を歩く』をめぐる記述に依れば、「水上は、昭和7年(1932)11月に等持院に移っている。同書に依れば、彼は、昭和11年(1936)5月に還俗し、等持院を離れた。つまり、水上が等持院にいたのは、昭和7年11月から昭和11年5月までであり、実質的に3年半ほどであった。」(上掲論文(4) 31頁)。

水上勉・供述「等持院での6年間の生活で。いちばん思出ぶかいのは、敷地内に東亜キネマの撮影所があったことである。境内でいつも撮影が行われていた当時は、まだトーキーがなかった。活動写真といい、市川百々ノ助、阿部五郎、羅門光三郎といった人たちの全盛時代ではなかったかと思う。東亜キネマだけではなく、近くの新興キネマ、第一映画、松竹キネマからも、山中貞雄、衣笠貞之助、石田民三監督などが、撮影に来た。(中略) 衣笠監督も等持院と縁の深い方で、檀家でも

あった。監督は東亜キネマにいたころ、等持院の庫裡中のひと間に下宿されていたとか」

このような衣笠・等持院における映画村の出現と映画文化の隆盛を、批判的に捉えた文化人もいることを、河島一人は論述している⁽²⁰⁾。これによると、画家の吹田草牧は、大正4年には志賀直哉が衣笠に移り住んだことや、椿寺西に入る「衣笠園」住宅地に大正6年に土田麦僊が画室を置いたことを、喜んでいる。一方、大將軍八神社前にあった日活撮影所が衣笠園の前に引っ越し、大正10年頃には追剥が出るくらい閑静な一条通が電灯の明るい商店街と化してしまい、日活、東亜、マキノなどの撮影所が建って、喫茶店や玉突場が軒を並べる活動村になってしまった、と嘆いているほどの都市化が進展したことが、論じられている。

このように、等持院・衣笠は、映画文化の大きな起源地ならびに発展地だったのである。

こうしてみると、衣笠の地が、芸術、学術、映画、宗教、文化の集積地になっていることがわかる。

4 都市商業地とアーバン・フリンジをつなぐ生活一体性

4-1 境界・お土居を超える連続性—西陣と衣笠の交渉・交流

旧京都市街地に隣接していた衣笠地域は、農地や空き地が多かった。この都市外周と市域を区別するものは、紙屋川である。豊臣秀吉によって、この紙屋川に沿って、都市内と都市外を区分し、都を守る境界とした。秀吉は、紙屋川に沿って、都市内を守護するために、「御土居」と呼ばれる土塁を築き、京の守りとした。これによって、洛中と洛外が区分された。天下統一を果たした豊臣秀吉が、戦乱で荒れた京都の都市改造を目途に、外敵の襲来に備える防塁と、鴨川の氾濫を抑える堤防として、1591年に建

造した。

そうした歴史を引き継ぐものの、アーバン・フリンジ時代も、西陣地域は、衣笠から都市部の北野天神にお参りにも行き、千本釈迦堂や千本閻魔堂のある千本地域には、油や衣類、繊維など日常食料もふくめて都市的事物の買い物に日常的に訪れていた地域である。盆の時期になれば余計にこの両寺院への参拝が欠かせないものとなっていた。京都の民衆は、特に京都西北部の民衆は、迎え盆で千本釈迦堂、千本閻魔堂で鐘をついてご先祖をお迎えし、左大文字の火でご先祖をお送りする。「千本釈迦堂・千本閻魔堂—左大文字」がお盆のセットになっている⁽²¹⁾（図5）。「京」都市伝統を引き継ぐ上京区・西陣地域と、その隣接地・衣笠地域とは、一体性ある相互往復の活動が行われていた。日常的に、経済の為、信仰の為、モノの入用の為、西陣から衣笠、衣笠から西陣への移動が相互になされていた。

すなわち、旧「都市市内部」西陣と、旧「都市隣接地」衣笠とは、一体化した「まとまりの地」としての統合性もあった。そのさらなる例を示すのが、金閣寺不動講社の信仰組織である。この通称「不動講」の信仰は、目にかかわる病気に特に効ありと言われ、多様な現世利益をもたらしてくれる石造りの不動明王への信仰であ

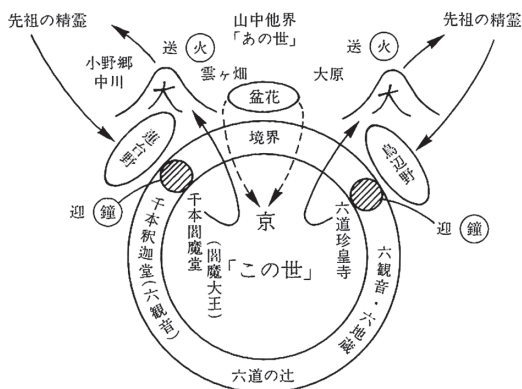


図5 盆をめぐる京都の都市民俗図
千本釈迦堂・千本閻魔堂の「迎え盆」と左大文字の「送り盆」がセットになる

る。金閣寺という日本を代表する大寺院での信仰であり、上京区・千本・西陣の繊維産業で栄えた経済力を背景に、多くの「京」旦那衆がこの地への信仰を行っていた。つまり、西陣地域から見ても、衣笠の地は頻りに訪れる「わが地」なのである。

金閣寺不動講の信仰を成立させる組織は、4つあり、むしろ、西陣3講が、その足元・麓にある衣笠地域の人々以上の熱意と信仰心の実施に精を出していたといつてよい。その宗教性を支える経済力を西陣は持っていた。それは、そのメンバーの多さからも言える。金閣寺不動講には、4分した組織があった。この4つの内3つが西陣の旧来からの都市域で組織されている。忠心組、心有組、三栄組の3組織は、西陣地域に属し、その中心街路、千本通には多くの商業店舗があった。衣笠には、協心組がある。この不動講社の代表は、明治13年の浅井新太郎社長以来、昭和2年まで、13人の社長（複数回社長就任者もあり）がいるが、すべて西陣

の3組から出ていた。昭和2年、内田章が初めて衣笠の協心組から社長を輩出した。昭和46年、内田章の息子、内田雄六が協心組から2人目の講社社長になった。この内田親子までは講社設立以来ずっと西陣商業地域の旦那が、金閣寺不動講社を代表して担っていた。それだけ、衣笠の地は、経済的、都市伝統的に西陣地域に「劣つ」ても、宗教的には西陣にとっては、極めて大事な本拠地「わが地」なのである。また、そうであるが故に、西陣と衣笠は、競争関係を心理的に持つときはもちろんあっても、4組で西陣—衣笠で「協力して」金閣寺不動講を支えてきたと言える(図6)。不動信仰の講社としても、よくライバル心を表にだす狸谷不動講社に対して、衣笠—西陣と一体化した金閣寺不動講社は、社会交流の歴史的蓄積を表出していた⁽²²⁾。

西陣の中心通りの千本通は、かつては「朱雀通」と言われ、旧首都「京」の南北のメイン・ストリートである。東西の商業中心道路は、織田信長が出店を許可した、上立売通、中立売通、下立売通である。南北の千本通と上立売通、中立売通、下立売通が交叉して、今も3つの交差点、千本上中下立通は、商業地の中心である。芥川龍之介の小説で有名な「羅生門」も、この朱雀通の都市中心街路の最南端に位置していた門を舞台としている。千本地域は、今も石碑には「聚楽第跡」や政治中心の存在を示す都市文化伝統を包含し、また当時、映画館も千本・西陣に千中ミュージック（千本中立売を示す）をはじめ千本日活など数軒あった。パチンコ店もふくめ娯楽中心街である。飲み屋や食堂、料理屋はもちろんここに集中してあった。西陣地域は、都市の商業中心であり、衣笠地域の住民にとっては、鈴木栄太郎の規定でいえば第2生活地区、ちょっと気の利いた物やおしゃれなものを毎日ではなくとも結構頻りに買いに行くためにおとずれる、いわば副都心地区である。京都の花街も、島原もあるとはいえ、東の祇園八坂



図6 不動構成員分布 衣笠と西陣が一体として支える金閣寺不動講

神社のそばにある祇園と、西の北野天満宮そばにある上七軒の2つが、東西で京を代表する。今でも、祇園の「都おどり」と上七軒の「北野おどり」は、京花街を代表する踊りである。旧都市境界の「幽・妖艶地」である。こうした京都商業文化をも、衣笠の住民は楽しみに訪れるし、また、話題にするほど日常歳時記として生活意識の中にある。

教育分野でも、衣笠・都市隣接外周農地と千本・西陣商業伝統地域を結びつけるのは、衣笠中学校学区である（写真6参照）。衣笠の平野、松原地域の北に、日本画家で文化勲章受章者の堂本印象の居地・アトリエが堂本印象美術館となりそれと南北に隣接し合って、衣笠中学校がある。堂本印象美術館の北に衣笠中学、南に立命館大学が広がる。まさに芸術、教育、学問の地である。衣笠中学校には、3つの小学校から生徒が来ていた。衣笠小学校（今の金閣小学校も衣笠小学校の分校として出発しその後独立した）、翔鸞小学校、柏野小学校である。翔鸞小学校と柏野小学校は、西陣千本の真っただ中にある。古くから市街地となり都市伝統を持つ地域である。繊維産業を支える諸工程を受け持つ下請けがこの地の街並みを特色づけている。京町屋は間口が狭く奥に長い「うなぎの寝床」と称されるが、この西陣・千本の家々も、間口が狭く、ウナギの寝床どころではない奥行の短さ

の家が多い。柏野・翔鸞学区地域に入ると、道路も旧道の狭さで家々が軒を並べる。路地に入ると、ガッチャンガッチャンという機織り（ハタオリ）の音が聞こえてくる。友人の家に入ると、機織り機が家空間の多くの面積を占拠していた。機織り機の油の匂いも柏野、翔鸞地区を歩くと漂ってくる。このガッチャンガッチャンの機織り機の音は、都市外周の衣笠地域に住む者の家からも、翔鸞学区、柏野学区の西陣と同じように、ときに聞こえてくる音であった。

柴田敦姫は「北区、上京のことを話そう。右大文字と向かい合った左大文字の麓、つまり西陣のあたりである。着物の街京都、此の界限では、友禅染の職人さん、染め織、織り屋さんを職業としている家が多く、傍らを通る『カタンカタン、カタカタ』と機織の音がしていた」と、この地域での機織り機の音への親近性を書いている⁽²³⁾。同時に、柴田敦姫は、衣笠在住者なのだが、この機織りの音を西陣と称して衣笠もふくめて、繊維産業の地として描いている。それほどに2地域は一体感をもって衣笠在住者にも認識されているということである。

東京オリンピックのあった1964年当時、衣笠中学校に通う柏野・翔鸞小学校学区出身の中学生たちが、衣笠小学校学区の友人を放課後訪ね、家々を見て「ごつつい家ばかりやな～」と呟いていた。農地・空き地が開発され、広い敷地の住宅が余裕をもって建造されていた。京都では、下賀茂地区と衣笠地区が、学者、画家、音楽家、作家、工芸家などを多く集め、「ええところ」という評価を得ていった。同時に、衣笠学区の生徒たちは、柏野・翔鸞学区の商業・工業伝統の歴史の長い凝縮された都市伝統と都市文化の何たるかを、さらに、在日コリアンの同級生との国際性を、肌身で知ることになる。また、繊維に係る織りや染めを生業とする家々が西陣から連続的に衣笠地域にあることも、中学校生活のなかで再認識し育つのである。西陣—



写真6 衣笠山麓にある衣笠中学校。ここに多くの美術家・工芸家・芸術家が集住するようになった（1959 和崎洋一撮影）

衣笠をむすぶ交流関係は、地域社会形成の上で大きな役割を果たす。

それは、1980年代ころに西陣市街地の産業構造が変化していった、繊維産業が全国全体に大儲けに結びつく仕事ではなくなっていき、経済的な不活性化に陥っていった時までの、旧態の工場生産労働がまだフルに稼働し、1960～70年代の高度経済成長の余震がまだ続いていた時代の、産業構造を如実に表している⁽²⁴⁾。この頃には、西陣地域の成功者や、ぎっしり稠密に家内制生産一住居が一体化した家屋に住んでいた労働者が、その経済的成功に従って、近隣の住宅可能地＝衣笠に移り住んできた動向をも反映している。西陣の正親小学校に通っていた友人・茂原隆司一家は、家業の法衣業の成功と共に、衣笠の小松原北町に移り住んでいる(口述2024年4月5日)。

4-2 〈糸偏職業〉まとめから読みとる一伝統 繊維産業と「衣笠芸術村」の混生と融合

西陣商業地区にある北野天満宮は、衣笠の鎮守の一つ旧平野の平野神社と隣接しあっており、衣笠住人からも親近感を抱く日常生活に根付いている神社である。商業的祝祭と言える「市」が、京都の市民には、東西南北どこに住もうと、南の東寺の「弘法さん」、北の北野天満宮の「天神さん」として、馴染まれていく。「弘法さん」は、弘法大師の月命日21日に開かれる毎月の縁日である。「天神さん」は、天神市で、祭神・菅原道真の誕生日6月25日と祥月命日である2月25日にちなんで毎月25日に開催される縁日である。衣笠学区の住民にとっては、25日は、特に北野天満宮との関係、往来が密になる日で、衣笠学区の生徒たちも、宗教、祈り、商売、娯楽、賭け、大道芸、芸能、骨董、古着、書物、異文化など、いろいろなことを娯楽性、祝祭性のなかで学んで育つ。商業性、祝祭性、娯楽性の都市文化を知らないうちに習得する。

和崎洋一のフィールドノートに現れた職業で、繊維産業の分野、通称「糸偏(いとへん)」の仕事の多さが際立つ。繊維産業、西陣機織り文化には、衣笠は歴史的に接し交流している。現在の衣笠、北高橋町に居宅のあった内田テル子の兄・内田嘉一(明治43年生れ)家は、衣笠にありつつすでに機織りを生業としていた。だが、左大文字の盆儀礼を担う町内仲間から松の山あげ作業などへの手伝いを頼まれ、農作業に慣れていないことから「力仕事には機織りは役に立たへん」と冷やかされたという。現・左大文字保存会・岡本義行会長の母方祖父・内田辰之助は、西陣・千本通りの千本閻魔堂の南にあった酒屋の出自であり、衣笠に移り住んでやはり西陣の機織り家内織物業を衣笠街道町で営んできたというファミリー・ヒストリーをもつ。左大文字保存会の岡本芳夫前会長の記憶からも、半世紀も前の時代に、すでに衣笠に、友人山北光一家のように、西陣織関係の職の家があった(山北光一2024年4月3日口述)。花山院御陵南の安田治家も帯など西陣織関係である。それほどに、すでに西陣繊維産業が宅地の衣笠のうちにも浸透し生業上の交流・混淆が起こっていた(写真7)。

その流れを受けて、衣笠の宅地化と生業編成を見る。上の職種分析に戻ろう。つまり、職業全体から読み取れることは、地域の生業特性が農業中心から伝統産業、さらには商工業・「会社」形態の仕事に変わってきているということである。その旧から新へのグラデーション的な重層遷移過程は、衣笠地域の繊維産業＝糸偏の仕事のなかにも認められる。

繊維関係、織物関係の仕事の多様さが、繊維産業の広がりや細分化や下請けピラミッドの産業構造を如実に現わしている。糸くり、織布工、織物調整工、織物従業員、組紐、帯地、呉服卸と出来上がっていく。さらに織物紋工業へと近代につながっていく。西陣地域の柏野小学

校区や翔鸞小学校区には、富山から繊維産業に職を得て（得るべく）西陣に移り済んだ同郷結社がある⁽²⁵⁾。西陣に糸を納めていた糸業者が、むしろ西陣に移り住んでそこで故郷・富山と西陣との接続役を果たし共に発展した。嘉永6（1850）年初代・礪波宗助が組紐師として入洛し、御所御用達となった。その後、織物に派生し、伝統産業を担う責務と誇りをもって発展してきた。西陣で今もとなみ帯として高名をはせている。生産する帯は、高度な技術と美的凝集がつまっており、20万円の価値をもつ高級帯である。宮中との関係も含めて誇り高い。在日コリアンの西陣繊維産業への従事も多い。組紐でいえば、伊賀の伝統技術も西陣に導入されている。西陣は、異文化交流性、国際性豊かな地域である。

織物業、織物職、という一般名称の仕事名がある。その産業の零細性や下請け性を想起させる「糸くり」という職業名がある。織物調整工、織布工、などの職業名も、家内産業を工人としてその作業を請け負ったり一部を担当したりしている労働像を思い浮かばせる。帯地、帯地屋、帯地製造業と、特定品の製造を職業としている仕事名もある。一品の製造を家業とする。糸組紐業というこれも特色ある繊維産業である。日本の着物文化を着物や帯や組紐で構成していくのだが、その単位を製造する職業である。呉服卸や呉服卸業、呉服悉皆業などのように、完成品としての着物を扱っている大小の規模の呉服関係職もある。彩色業の職業名は、専門性メチエに生きているプライドを感じ取る。織物紋工業は、紋を染め入れる工程が工業化されていることを示している（写真7）。

衣笠にあるとして記述された、上述の仕事を連続・並記していくと、糸くりから染、彩色業、糸組紐、織布工、さらに織物、帯地製造業、呉服、呉服悉皆業まで、部品から製品へと組み合わせ完成度が高くなっていき、伝統繊維業の細



写真7 衣笠で西陣伝統織物文化と近代芸術性が交わる。「編物研究所」の看板を掲げる平野桜木町の家。（1959年 和崎洋一撮影）

分化や工程が反映されている。と同時に、彩色業であれ織物調整工であれ、最も伝統的なこの工芸仕事は、現代アートへの技術適応や応用が効く職業群である。伝統—現代の連続性が内包されている。

こういう伝統的な「技術詳細にうるさい」文化や實際を事細かに見て育っているかどうかは、大きな文化蓄積の指標になる。糸繰り、組紐、色染、絵画、意匠、部分と全体の関係、色彩の合わせ方、この伝統基層があるからこそ、新しい美術、工芸、芸術、学問世界への融合速度が速まる。西陣織文化、着物文化は、華道・茶道をも結びついて随伴する。新芸術がこの地に侵入し浸透してくる速度と容易さを、大きく加速した。新芸術が成った地域形成は、「衣笠芸術絵描き村」と称されるものであり、日本という国家の枠組みから権威化された芸術の到来物である。伝統工芸、伝統職人技の地から、やはり新しい都市芸術文化は生成している。歴史の厚みが新進を創り出す。西陣と衣笠は、連続するのである。

水島あかねは、この旧西陣の西北部への拡大、つまり衣笠地域への膨張を、以下のような西陣の都市空間の再編という視点から、論じている⁽²⁶⁾。「機業地域の拡大」という節を立てて論じている。

「西陣機業の近代化による機業者間の階層

分化がもたらした賃機業者の織急増は、実際の機業地域をどのように変化させていったのだろうか。

享保2年(1717)の『京都御役所大概覚書』には、“西陣、東は堀川を限り、西は北野七本松を限り、北は大徳寺、今宮旅所限り、南は一条限、又は中立売通、街数百六拾八町。”との記述あり、近世においては、この範囲が公的に認められた西陣の境域であった。それが明治38年(1905)発行の『西陣機業沿革調査書』によると、“東は室町通に至り南は出水に達し西位及び北位は御前通及大宮頭に及びて大集団を為せり”と、先の境域から東・西・南に広がりを見せた。

では、実際に明治大正期の変革期は、西陣の市街地をどのように変化させていったのか。(図3)(図4)は、それぞれ明治35年と大正15年に発行された地形図である。明治35年(図3)には武家地跡を中心に、数多くの空間地域が残っており、改めて東京遷都の影響の大きさを伺える。西北部には畑が広がっていて、また市街地化が進んでいない様子がわかる。それが大正15年(図4)には、空地の建て詰まりが見られ、西部に市街地が広がっている。このように、西陣機業地域の広がりとともに、周辺地域は西陣機業地域の中に取り込まれていったのである(178-179頁)。

西陣の織物産業空間の建て詰まりが、余裕ある西部つまり衣笠方向への展開を方向づけたということである。

川島織物や伊豆倉福織物、龍村美術織物などの伝統繊維産業が西陣の地にあったことが、そのすそ野を衣笠まで広げ、それを受け皿として容易に、近代の芸術としての日本画、西洋画、現代工芸、学問学術が衣笠に浸透してくるという、「衣笠絵描き村」の成立などの動向と

合致・随伴しこれを立証する歴史動態を、ここに読み取ることができる。西陣の伝統技術と現代芸術を繋ぎ渡すものとして、元NHKディレクターが製作した芸術映画『地球交響曲』がある。これは地球の自然環境自体を芸術化しようとした作品だが、ディレクターの龍村仁(1940-2023)は、龍村平蔵以来の3代目西陣の歴史をもつ。日本で初めてむき出しのブロックを使って西洋建築をなし、日本のモダン建築とデザインで独自の世界を開いた本野精吾は等持院北町に住んでいた。その3男・本野東一はロウケツ染めの現代染色家(東京国立近代美術館・本野東一「自由への旗印」展開催(1999年5月))で大阪芸術大学教授であったが、その妻・本野博子(地域社会では通称「本野たか子」)は西陣の染技術一家に育っている。本野東一郎で毎週染色教室が開かれていたが、本野東一が指導したか子が指導補助を務めていた。伝統美術と現代美術が衣笠で融合する。現代美術の製作に伝統技術がそのまま生きる。こうした新芸術の製作補助・製作促進や意味理解に西陣伝統文化が大きく貢献した。日本水彩画家の柴田敦姫は、北区・上京区を歩いて全体として「織り屋さん以外に、友禅染は、デザイン・模様を描く人、糊つけ、地に写す人、一と工程があり、組合のようになっている」と述べている。こうした工程をそのまま映す職業が、上述の衣笠フィールドノート「糸偏職」に並んでいる。

西陣伝統技術・芸術の派生体・衣笠の上に、「衣笠絵描き村」は成立したのである。受け皿としての芸術・工芸土壌の民衆知、社会知があったからこそ、衣笠芸術性は花開いた。堂本印象は、衣笠の住人である。先述したように、今の立命館大学の衣笠校舎の北側に居住していた。堂本印象は、京都市立美術工芸学校を卒業後、西陣織の図案描きの仕事をしていた。やはり、堂本印象自身の経歴が、西陣と衣笠をつなぐ展開なのである。伝統工芸・西陣と近代芸

術・衣笠をまたいで接合・展開している。本野精吾は、衣笠・等持院に在住しながら、西陣織物館を建立し（1914（大正3）年建立、京都市登録有形文化財）、衣笠から西陣伝統地域に向ける文化的架橋の働きを行っている。これについては、笠原一男が詳しい歴史分析を行っており、衣笠の「絵描き村」（笠原の用語では「衣笠芸術街」）に、絵画系ばかりではなく、建築、デザイン、学術、教育の関係者が凝集して居住していることを指摘している⁽²⁷⁾。

また、この西陣から衣笠への伝統繊維産業の外延的な拡張・派生は、現・左大文字保存会・岡本義雄会長の母方叔父の内田嘉一の職が衣笠にいてすでに織物業であったこと（1970年前後）も、衣笠での西陣伝統の波及の現代史的な例として確認できる。上述の整理「*美術・工芸・芸術・学術・教育」範疇の職として列挙したなかにある図案業、染色工、染色画工といった職業名は、西陣伝統、日本の伝統絵画・衣裳技術とつながりまたぐものである。染色工→図案業→画家へと旧から新にスライドする。逆のオリエンテーションとして、*糸偏職業として列挙した、糸くり、染色業、糸組紐業、織物調整工、織物業、帯地製造業、帯地、呉服業、呉服悉皆業、呉服卸、家紋工業、とずらり並んだ部分から着物完成品、その加工、集成販売までを扱う職業の連続は、西陣伝統織物や日本伝統着物産業を支えるラインアップとなっている。

さらに、それは、どれも現代的適応の方向性を有しており、染色業や家紋工業のように伝統から新技術・芸術へと架橋・展開していったことを容易に認知させうるものもある。新・芸術→旧・伝統工芸のオリエンテーションからも、旧・伝統工芸→新・芸術のオリエンテーションからも、ともに重なり合い、衣笠の地で、「絵描き村」「芸術街」まだ呼称としては固定されてはいないが、絵画、音楽、工芸、デザイン、学問、教育の諸領域が多重にかさなる「衣笠総

合文化街」がバルビゾンのように成立したと言ってよい。その文化創造を可能にしたのは、衣笠のこの職業群から認められる衣笠地域に沈殿した繊維産業から美術芸術学問へと重なり広がる遷移的重層である。芸術院の権威は、西陣民衆文化の歴史時間の蓄積の上に立って衣笠で開いている。衣笠に外延展開した都市・西陣の下町経済文化の沈殿が、新しい新中間層の戦後経済の安定の先に、先走った試作と批判精神と創造性に充ちた「衣笠芸術街」を生んでいったのである。

結び—新旧グラデーション混生地としてのアーバン・フリンジ衣笠の社会形成と文化創造

衣笠に移り住んだ日本画家、西洋画家、現代芸術家たちが、雇ったり、補助者アシスタントとしたり、タッグを組んだり、素材を注文したりする、自らの芸術活動における重要手段やその理解者が、衣笠にそろっていたと捉えられる。「衣笠絵描き村」が形成されたのは、そして、衣笠が芸術・学問・教育・映画・文化の新しい凝縮地となり得たのは、自然や題材に恵まれた環境の良い地であることに加えて、こうした新芸術を受容する「京」以来の長い技術・芸術・産業伝統が西陣からの派生・発展形として衣笠の地に西陣産業知としても民衆知としても生成・蓄積していたからである。

農地や空き地を手放した衣笠の人たちが馴染みあり情報も多い西陣産業へとまず金銭経済に傾斜していったことがわかる。またこれは、旧西陣・繊維産業地域の人たちが、狭い都市部から余裕ある住宅環境を求めて、歴史沈殿した意味だらけのシンドイ土地から、文化の凝縮があるからこそ誇りと時に差別さえある土地から、財もてば「乾いた」郊外住宅地に、隣接宅地に拡大展開してきた、という流れも表している（写真8）。都市全体を觀れば、このように市内産

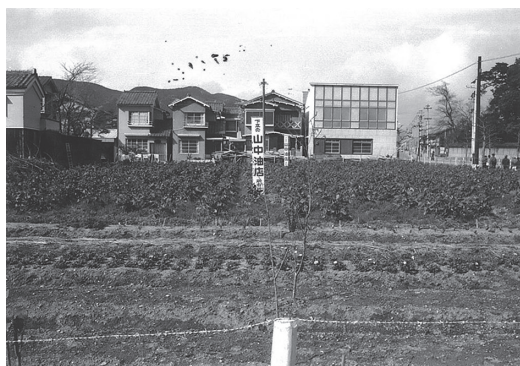


写真8 平野神社西側の農地と建て売り住宅。山中油店（西陣の老舗・大商店）の広告柱が立つ。山中油店の大資金援助で左大文字の火床43基（セメント造り）が出来た。（1959年 和崎洋一撮影）

業が、旧都市外延部に拡大してきたのである。その産業構成上の都市化を、衣笠における自主申告されたこの多数で多様な「糸偏」職業名は表している。旧糸偏からのスライド派生は、新旧の接合や、実験的な試し芸や立命館という反骨の学の歴史拠点や、新規な大小の芸術運動を内包して、また、左大文字という日本の大祭礼を中に持つ地域として、文化的折衝・競合・創造を生んできた。単なる「乾いた」郊外住宅地にはさせなかった。それを可能にしたのは、お土居を乗り越える、隣接して歴史的かつ連続的に一体化する旧「京」文化のしつこい粘着的な自他交流の民衆文化力である。「民衆知」はやはり歴史によってはぐくまれる。それを可能にしたのは、民衆知を構成する中見、つまり、西陣―衣笠の、工程が細分化され、砺波も「在日」も伊賀も支えた、階層的な家内制工業・商業文化と瀟洒なモダンを先走った宅地文化とが、産業浸透性、そのパラ繊維産業の情報文化流通性、学区内での相互混淆養育性、宗教信仰を共有して支える相互文化支持性などによって交流し、地域としての一定のまとまりの歴史過程を、差異はあってもそれを超えて、共に醸成してきたからである。

繊維産業は、繊維を使った産業、経済だけではなく、それに付随した美術、工芸の分野を必

要技術として広がり備えている。この広がりによって伝統技術は新時代の芸術と結びついていく。繊維産業が必要技術に広がり、その技術が美術・工芸に広がり、その美術・工芸が現代芸術につながるグラデーション遷移過程を含んでいる。そのグラデーション過程として衣笠の都市化、宅地化の社会変動を、文化的意味を包含したこの地の文化変容、むしろ、文化創造として位置づけることができる。この衣笠における文化創造は、和崎洋一が、ほとんど空き地・農地だった衣笠学区に、近郊農家から職種変更・展開した元「土着」と、衣笠に来住した新参としての新芸術・都市勤労者に象徴される「入組」とが新たに「地域社会の形成」を成した、つまり「地域社会の創造」を成したことを捉えて考察したことと、表裏一体をなしている。

西陣社会が郊外隣接地・衣笠に外延展開し、その美術・技術・衣装・意匠を見る眼識の長く深い歴史伝統の素地が、そこで日本という枠組みで権威化された新芸術の受容をより容易に促した、と理解できる。もとよりあった伝統美術・技術が継続性をもって存在し新しい権威付けによって再評価され新しく枠組み化・評価され新しいラベル・名づけを得て、日本の日本画壇、西洋画壇、デザイナー、建築家、工芸家、学者、文化人が衣笠地域に集中して「衣笠芸術」が「誕生」「創成」したのである。

（付記）文中の氏名は敬称略。貴重な口述を頂いたインフォーマントの皆さんに感謝いたします。

注

- (1) 例えば、昭和10年に、恒久施設としてセメントで固めた火床を43基、大文字山に設置した。西陣・山中油店の援助によって昭和10年、この恒久施設の建立が成った。これを昭和38年には、「大」の5隅にそれぞれ2基ずつ増設して計53基とし、都市化、観光化にともなう行事拡大に伴って、大の字を見栄えがするように大きく拡大している（和崎春日『大文字祭礼の都市人類学的研究』刀水書房、1996年、288—295頁）。
- (2) 和崎洋一「地域社会の研究」『人文学報』第21号、京都大学人文科学研究所、1965年、153—174頁
- (3) 上掲論文（2）153頁
- (4) 河島一仁「京都・衣笠の地理的变化（1868～1960）—等持院村と立命館—」『立命館文学』649号、2017年、15頁に、山地と平地の境界部分に、金閣寺、龍安寺、仁和寺などの有名寺院が立地している地理状況の説明がある。15—34頁の記述を要約。
- (5) 上掲論文（4）16—17頁。
- (6) 立命館ロンドは、1975年にはすでに組織されていた。この時、立命館学生だった高橋一臣、河野がメンバーとなり、1977年には藤原久夫、青柳平人が加わって、立命館南の六請神社の祭礼を立命館ロンドで調査している。
- (7) 衣笠を愛しむ会（浅野伴子、安宅光雄、井田友子、岩崎隆、小川由美子、壁瀬秀夫、亀村啓一、河本淑子、榎原潤、芝田正夫、杉本和子、高橋みどり、曲子明良、村岡弓子、和崎春日）編『衣笠のいまむかし』2024年5月、衣笠を愛しむ会発行（印刷中）は、文化人のその衣笠居住をめぐる堅実な追跡調査を行い、モダン・学術・芸術・文化の衣笠持ち込みと定着を検証し、例えば、小説家では水上勉、高橋和己・高橋たか子（等持院北町）、井上靖（等持院西町）、学者では中国文学の小川環樹（小松原北町）、社会学のオーストラリア・ラトロブ大学杉本良夫名誉教授（等持院北町）、ペルシャ・インド学の足利淳氏（衣笠西馬場町）、箏曲家では河本真輝琴（平野宮本町）、能楽師では喜多流・高林白牛口二（等持院西町）、等のように、多数の文化人が、衣笠学区に居住しこの地を文化街へと形作っていったことを、各人の居住地を定めて論じている。
- (8) 河島一仁は、藩政村が明治の行政村の成立によって、境界が潜在化したことによって、歴史地理学的にその藩政期の境域を掘り起こす分析を行っている（上掲書（4）16—20頁）。
- (9) 衣笠を愛しむ会編『衣笠のいまむかし』が行っている考察の歴史社会学的意義の一つは、長く判明しなかった、平野神社と衣笠小学校の位置関係の発見とその明示である。平野神社の南西角に衣笠小学校が位置していたことを突き止めて示している。不分明だった薩州屋敷の位置同定も、等持院西町に認めて、この研究会が達成したことの一つである。
- (10) 河島一仁「京都近郊の地理的变化（1889～1940）—等持院村、マキノ省三、そして中川小十郎—」『立命館文学』593号、2006年、100—111頁を中心に。
- (11) 上掲論文（4）25頁。
- (12) 上掲論文（4）28頁
- (13) 柴田敦姫『京都万華鏡Ⅱ 敦姫エッセイ集 昭和・平成・例話に生きて』かもがわ出版、2023年6月
- (14) 笠原一人「衣笠・等持院界限における本野精吾を中心とした建築家の活動について」『郊外住宅地開発を導いた学術・芸術・芸能に関わる人々の居住動向に関する歴史的研究—近代京都を事例として—』科研基盤（C）平成14～15年度、研究成果報告書（2004年、中川理編著）35—51頁。
- (15) 上掲論文（14）35頁
上掲書（7）は、衣笠美術や衣笠文化をめぐる丹念な歴史地理学的研究の書である。ここで、例えば、美術家なら、洋画の井澤元一、黒田重太郎、南画の大橋廉堂、彫刻の菊池和夫、日本画の堂本印象、曲師光男、猪原大華、山口華陽、小野竹喬など、80名もの美術家が衣笠の各町に居住していたその居住地をドットマップで示し、その集住による衣笠地域の文化特性を描き出し、「衣笠絵描き村」の分厚さを示している。
- (16) 中川理編著（14）の「おわりに」で、中川は「郊外住宅地の趣味性」という用語を用いて、芸術的チャレンジや遊び心の精神があった、と指摘している（85頁）。また、河野良平も本野精吾の設計をめぐり、モダニズムの範疇にとどまらない、西洋の古典的な美しさと、日本画や日本のロウケツ染めといった日本的美しさとの融合を、近代の新しい材料や構造をもちいて実現しようとしていた、という「挑戦性」「新規性」「趣味性」について論じている（『京都モダニズム建築』美学出版、2019年、16—21頁）。
- (17) 上掲論文（14）35—51頁
- (18) 上掲論文（14）37—41頁。衣笠の等持院北町58番地の本野邸が建築家、デザイン関係者たちが集まる結節地となっていたことが論じられている。
- (19) 上掲論文（4）31頁
- (20) 河島一仁、上掲論文（10）、104頁
- (21) 和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、1976年、117—123頁。「迎え盆」で迎え鐘で精霊を迎え、「送

り盆」で送り火で精霊を送る都市全体の構造がある。都市先祖の「迎え＝送り」の対構造上、西陣と衣笠は地域一体化する。

(22) 和崎春日『大文字祭礼の都市人類学的研究』刀水書房、1996年、82－92頁。

(23) 上掲書 (13) 15頁

(24) 藤塚吉浩「京都市西陣地区におけるジェントリフィケーションの兆候」『人文地理』第44巻第4号、1992年、57－68頁）。藤塚は、西陣側で人口の減少動態を把握し、その回復傾向が出てきたことを論じている。

(25) 西陣における、撚糸から帯など繊維製品が出来るまでの、下請けや部分製造の階層構造は、西陣伝統産業を長く調査してきた、京都精華大伝統産業イノベーションセンター長・米原有二教授によると、富山の砺波からの職人や技術者が、在日コリアンと共に西陣に移住して働きこれを支えていくことになった技術基盤の効力が大きい。この時代、西陣に行けば何とかなる（喰える）という時代風潮があった（米原有二教授・口述）。

(26) 水島あかね「西陣における都市空間の再編」『京・まちづくり史』昭和堂、2003年、高橋康夫・中川理編、176－185頁。

(27) 上掲論文 (14)